ブラジル　柑橘類地帯の48％がカンキツグリーニング病に感染

FreshPlaza　2025年9月11日

Fundecitrus（柑橘類生産保護財団）の新たなデータによると、ブラジルの柑橘類主要産地（柑橘類ベルト）の約48％がミカンキジラミによって媒介されるカンキツグリーニング病に感染している。研究グループは、感染が8年連続で増加しており、世界最大のオレンジ及びオレンジ果汁生産国であるブラジルの生産量を減少させていると報告している。

2024/25年度シーズンのブラジルのオレンジ出荷量は、40.8kg入りの箱に換算して2億3,090万箱と推定されており、近年で最も少ない。果樹園の回復が期待されていたものの、同財団はカンキツグリーニング病の拡大が依然として収量に影響を及ぼしているとしている。

同財団は、5月時点で2025/26年度のオレンジ生産量を3億1,460万箱と予測していたが、これは2.5％減の3億674万箱に下方修正された。

この病害にかかると、果実が緑色のままになり、形が歪み、苦味を帯びるため、生食用にも果汁用にも適さなくなる。CropLife Latin America（中南米地域の農業科学産業の業界団体）によると、カンキツグリーニング病によるブラジルでの年間損失額は約1億2千万ドルに上る。また、過去7年間にアジアで5千万本以上、アフリカでは1千万本以上の樹木がこの病害により枯死したと報告されている。

ブラジルのサンパウロ州及びミナスジェライス州に位置する主要柑橘類地帯では、細菌の生存に適した気象条件が続いており、病害の防除が困難な状況にある。

出典：Reuters

南アフリカ　米国の30％の関税の下、柑橘類の輸出が5％増加へ

FreshPlaza　2025年9月11日

南アフリカの高価格果実輸出産業は、2025年シーズンを米国による30％の関税という新たな貿易条件下で迎えている。この関税は、柑橘類、ベリー類、ナッツ類、生食用ブドウの輸出戦略に影響を及ぼしており、輸出業者は関税負担の買い手との分担、代替市場の模索等、様々な選択肢を検討している。これらの見解は、アブサ（Absa：大手金融グループ）が新たに発表した農業動向報告書に基づくものである。

柑橘類　オレンジ及びソフト柑橘類の輸出は、依然として南アフリカの園芸品貿易の主力である。ネーブルオレンジの輸出は5％増加すると予測され、一方、バレンシアオレンジは世界的な果汁価格の低迷にもかかわらず（原文は「低迷により」）、生食用市場から加工向けに転用される果実が増えることで、6％の増加が見込まれている。ソフト柑橘類は、ペルー及びモロッコとの競争が激化しているが、もし貿易交渉が進展すれば、米国と欧州連合は依然として重要な輸出先となる。レモンの輸出は、収量の増加とスペイン及びトルコにおける供給量の不足に支えられ、当初の予測を6％上回る見通しである。

ベリー類　ブルーベリーは霜害による打撃から回復し、2024/25年度シーズンには6.7％の輸出の増加が見込まれている。ペルーからの供給の遅延によりシーズン序盤の価格は好調であったが、シーズン後半にはペルー及びチリからの出荷量が増加するため市況が軟化する可能性がある。南アフリカの地理的条件は、インド及びその他の新興市場への輸出を後押ししているが、競合国の有利な貿易協定が制約となっている。

生食用ブドウ　ペルー及び中国での生産拡大により競争に直面している。米国で最大30％の関税が課されることで、欧州及びアジアの市場への依存度が高まる。輸出業者は、競争力を維持するため高級品種への重点化、物流の最適化、小売業者との連携強化を進めている。（以下、マカダミアナッツについて省略）

今後の見通し　柑橘類、ベリー類、生食用ブドウの各輸出分野は、適応力と多様化を重視している。港湾業務の効率化、収量の最適化、代替市場との連携が関税及び競争圧力への重要な対応策であると見られる。

出典：Food for Mzansi